

きょうの説教題「足を洗う」という言葉の意味は、「悪事やよくない仕事をやめて正業につく。堅気になる。まじめになる」ということです。

幼稚園児の中に、私のことを組長と呼ぶ子がいます。それはそれで間違いでもないので、普通に返事をしています。幼稚園には11の組があって、それを束ねているのが私の立場ですから、組長の中の組長ということなのです。ただし組の名前は全部花の種類なので、かわいいものです。

しかし幼稚園の外で、町中や駅などで子どもたちから「おー組長！」などと言われると、少し困ります。見た目では、園長よりも組長の方が似合うと自他共に認めるところなので、世間様が気になります。

全員が元ヤクザ、そして人生のある場面で転機がおとずれ、あるいは回心と言った方がいいかもしれませんが、聖書に導かれ、洗礼を受け、ある者は牧師として立てられ、また信徒伝道者として働いておられる方々があります。彼らは自分たちのことを「ミッション・バラバ」と名乗り、全国行脚をしながらイエスの福音を宣べ伝えているのです。『ミッション・バラバとその妻たち—元ヤクザ・泥沼人生からの回心—』という本を読みました。そこには8名の元ヤクザの人生と、何が起こって、神さまがどのように働きかけて、奇跡的な導きがあったかが記されていました。

前書きには次のような記述がありました。

「ヤクザの親分は子分の面倒を見る。子分は親分に絶対忠誠を誓う。いわばギブ&テイクの関係である。しかし一方的に無条件で、人間の罪をゆるすために身代わりとなって十字架にかかったのはイエス・キリストだけ。どこまでもギブ&ギブの関係なのだ。

ミッション・バラバのメンバーにはその違いがよくわかる。

それにしても彼らはなぜヤクザになり、ある時を機になぜ拳銃や日本刀を聖書に持ちかえたのか。私たちとどこが同じでどこが違うのか。メンバー8人の歩みをたどり直してみよう」。

ヤクザ組織の組長だった吉田さんは、イエスと出会って組を解散し、やがて洗礼を受けます。しかしヤクザ稼業以外の生活のすべを知らないのです。そこで祈ります。

「『神様、心を入れかえましたから、どうか月収 500万円の仕事をください』。そんな勝手な祈りをぶつけるのだが、いっこうに聞かれないので、300万円に、さらに100万円にと“値下げ”。それでも祈りは聞かれなかった。

そんな夏の日、小学2年生の娘が50円のアイスをおねだりした時、お金を家中探して畳までひっくり返して、出てきたのは30円。妻は砂糖水を凍らせて娘に与えた。

かつては、チャリンと音のする小銭なんか金のうちに入らん、財布が重くなる、とばかり釣り銭を道にばらまいていた。

『そんな自分の傲慢さ、醜さを思い知らされて、神の前ではどんなに自分が無力で取るに足りない者か初めてわかったんです。打ちのめされる思いで、泣きながら神様にお詫びしました』」。

井上さんは、ある女性から聖書をもらったことでイエスに出会いました。

「もしキリストが本当の神なら、今の生活から足を洗わせてくれるという気がして、それを祈り求めていった。ヤクザを続けるほど強くはないし、自力で足を洗うほど強くもないのを、自分でわかっていたからだ。しかし『弱いときにこそ、私は強い』と聖書にあるように、神の前では早く降参した者が勝ちなのだ。世間の常識とは逆だが、弱い者ほど必死で神の助けを求めるので、むしろ最も強くなることができるからである。

聖書をくれた女性は何度も彼を教会に誘ったが、教会は心の清い立派な人でなければ入れてもらえないと思っていたので、『俺なんかの行ける場じゃない』と尻込みし続けた。でも1回ぐらいはと思って義理で出かけ、教会の人たちに笑顔で迎えられた時、『ああ、教会っていいところだな』と、しみじみ思った。やがて、札幌から小樽の教会まで毎週礼拝に行くようになり、皆の暖かい心遣いの中で信仰が育まれていった」。

ヤクザの世界で大失敗をしでかし、同じ組員や何百人ものヤクザから命を狙われる身となった鈴木さんは、長い逃亡生活を続けます。その中で妻とのやりとりを通してイエスと出会うことになり、逃亡生活をやめて妻の元へと帰ります。

「その後結成したミッション・バラバの活動がマスコミで注目され出したため、以前から鈴木さんの命を狙っていた大阪のヤクザたちが家に乗り込んで来た。

その瞬間、無意識のうちに出刃包丁を握っている自分に気づいた。不安のあまり、過去の自分が顔を出してしまったのだった。その時、聖書の言葉が心に浮かんだ。

『恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る』。

一瞬のうちに安らぎを取り戻すことができ、彼らを室内に招き入れ、穏やかに話し合って和解できた。

『神様が守ると言われたら、どんな危険からも守ってくださるという確信が湧いてきました』と回想している」。

中島さんはイエスと出会ってヤクザから足を洗い、縁があって学校経営を行ったものの、それに失敗してしまいます。

「ヤクザ時代は1日何百万円も湯水のように使ってきただけに、学校経営に失敗した当座味わった無収入の日々は、自分の無力さを思い知る、悲しく苦しいみじめな試練の時でもあった。

『えーい、めんどくさい。ヤクザに戻れば手っ取り早く金を掴む方法なんかいくらでも体で覚えているのに、何だってこんな思いをしてまで…』。

昔の仲間からは『ヤクザに戻れば、なにも苦勞することなんかねえじゃねえか』と誘いがかかる。

『でも、イエス様に出会っちゃったんだから、もう過去には戻れませんよ。その葛藤の中で、何度泣いて祈ったかわかりませんね。でもそここのところを通されなければ、今の自分はないんです。今はすべてが益となっていますよ』。

「先に殺ったほうが勝ち」、「刺せば監獄、刺されりゃ地獄」、そんな日々をおくっていた金沢さんは、イエスと出会って、「『神様。もうあなたの前に降参します』と叫ぶしかなかった」と言います。

季節は冬ですが、幼稚園の子どもたちは寒さに負けることなく、水遊びを楽しんでいます。裸足になって庭に出て、ジョウロやバケツで園庭の斜面に水を流し、足の裏で砂と水の感触を楽しんでいる子もいます。

園庭での自由遊びが終わると、今度は保育室に入らなければなりません。ドロドロになった足で水道の所まで行き、それぞれが足を洗ったり、また自分で洗えない子には教師が足を洗ってあげている姿を目にします。

イエスは弟子たちの足を洗った後で言っています。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」。

私たちはこのことの意味を、どのように受け取ってきたでしょうか。互いに親切にしましょう。立場の違いを越えて働きかけましょう。誰にでも優しく振る舞いましょう。神の前では平等であるのだから、分け隔てせずにつきあいましょう。その他いろいろ。

そして、本当に足を洗う程度のことだと思ってこなかったでしょうか。幼稚園の教師が園児の足を洗う程度のこと。生活の中で出会う人々に親切にする程度のこと。教会では社会での地位や立場を気にせずにつきあう程度のこと。他者に対して少し優しくある程度のこと。上下関係など気にせず交流をもつ程度のこと。そういった理解であったのではないのでしょうか。

しかし聖書を通して、「足を洗う」という言葉をキーワードにして読んでいくと、決してそうではないことがわかってくるのです。

創世記18章(P.23)には「イサク誕生の予告」の場面があります。

「主はマムレの樫の木所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。

『お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから』。

その人たちは言った。

『では、お言葉どおりにしましょう』。

アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

『早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい』。

アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした」。

アブラハムが足を洗うことを促すためにとった行為は、まず地面にひれ伏すことです。そしてパン菓子を作らせることです。さらには柔らかくておいしそうな子牛を料理させることであり、凝乳、乳を用意することでした。そしてアブラハム自身が給仕をしてもてなすことまで伴っていたのです。

足を洗ってもらうために、アブラハムは水を用意しただけではありませんでした。足を洗ってもらうために、自分の財産である子牛を屠って食事を提供し、渴きを癒すための高価で栄養価の高い飲み物を持ち出し、休憩のための場所を調べ、自ら働き人となって、最高の接待をしているのです。客人に対して献身的なふるまいを徹底的に行うことが、足を洗うということに伴っていたのです。

サムエル記上のダビデ物語の一節には、次のようなことが記されています。

当時のダビデは、サウルという王様に追われる身でした。しかし 600人の兵士を擁するユダ南部における一大勢力でもあったのです。そしてそのリーダーであるダビデには、同時に 600人の一族を養っていかなければならないという責任がありました。そこでダビデは、ナバルという男の元へ従者を派遣します。このナバルは頑固で行状が悪かったのですが、非常に裕福な羊飼いでありました。

ダビデの側からすれば、自分の勢力による縄張りの中にいる者は、自分たちの庇護の下にいるのであって、平穏な生活を保証されていることに感謝するのは当然だという考えでした。そしてナバルもその対象だったのです。ダビデは極めて礼儀正しく、ナバルに対して用心棒代・ショバ代を取り立てようとします。

ナバルの方は、羊飼いの収穫感謝祭に当たる羊の毛の刈り込みを行っており、それには盛大な宴会がつきものでした。ダビデはその宴会からの相伴・お裾分けを望んだのでした。それが 600人の一族を養うための 1つの方法でもあったからです。

それに対してナバルはこう返事をします。「ダビデとは何者だ、エッサイの子とは何者だ。主人のもとを逃げ出す奴隷が多くなった。わたしのパン、わたしの水、それに毛を刈

る者にと準備した肉を取って素性の知れぬ者に与えろというのか」。

ナバルは当然ダビデのことをよく知っていて、こう言っているのです。ダビデが自分の居住する地域の一大勢力であることも知っており、サウル王のもとから逃げてきたことを皮肉った上で、自分の財産は分けないと言っているのです。

その返事に対してダビデは怒り、ナバルを滅ぼしに行こうとしますが、後から事情を知ったナバルの妻が表れてとりなします。知恵にあふれて聡明なナバルの妻アビガイルの登場によって、ダビデはナバルを滅ぼすことをやめます。その後ナバルが死ぬと、ダビデはその妻であったアビガイルを自分の妻に迎え入れようとしています。

そのことに対するアビガイルの態度と言葉です。「彼女は立上がり、地に伏して礼をし、『わたしは御主人様の僕たちの足を洗うはしためになります』と答え」た。

当時の女性の地位の低さという点は差し引いて考えなければならぬかもしれませんが、それでもアビガイルのとった行為は、徹底的に自分を低みに置いて、ダビデに、あるいはその僕にさえも、仕えようという姿勢を見せています。

足を洗うということに伴うのは、自分を低くして相手に仕えることなのです。自分の生き方として、足を洗うことを選んでいなのです。それは、相手を中心にしての自己犠牲を伴う行為です。そのような生き方をするという決意なのです。

これらのことからわかるように、足を洗うということは、私財を投げ出すことであつたり、喜んで自己を犠牲にすることであつたり、奉仕と献身の業であつたりするのです。それらすべてを含んで、足を洗うという行為が成り立つといえます。

イエスが弟子の足を洗ったということは、神の子が奴隷のような働きを担ったということです。愛によって裏付けられた奉仕として、足を洗ったのです。そして自己犠牲を伴って、足を洗うことで伝えたいことがあったということです。

すなわち、十字架が、神の救いの業の表れであるということを受け入れるかどうか、信じるかどうか、そのような問いかけが、イエスの足を洗うという行為の中に見て取れるのです。

ミッション・バラバの人たちはこう語っています。

「キリストを信じるほど幸せな人生はありません。このことを生涯命がけで伝えたい。そのためならどこへでも行くつもりです」。

「多くの人が私の内にあるイエス・キリストに出会ってくださり、あのヤクザな男を変え、すばらしい人生を開いてくださった神がいるんだということを知っていただきたいんです。そのためには命が果てるまで、精一杯仕えたい」。

「どんな人でも、イエス様に出会えばやり直しができます。そしてその後の人生には、無限の可能性があるんです」。

イエスの言葉をもう1度聞きましょう。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」。

イエスを模範とすることに、近づいていきたいものです。